

# 英検と CEFR との関連性について 研究プロジェクト報告

公益財団法人 日本英語検定協会 主任研究員 Jamie Dunlea

Dunlea, J. (2009).「英検と CEFR の関連性について Part 1」.「STEP 英語情報 11・12 月号」

Dunlea, J. (2010).「英検と CEFR の関連性について Part 2」.「STEP 英語情報 1・2 月号」

上記刊行物より転載

## ■はじめに

最近、CEFR という言葉を耳にしたことがある人が増えているのではないのでしょうか。CEFR は Common European Framework of Reference for Languages のことで、欧州評議会 (Council of Europe) という組織によって 2001 年に正式に公開された枠組みです。CEFR は、ヨーロッパにおける外国語教育の向上のために、第二言語の使用、教育方針や学習者の達成度など、様々なことについて共通の理解を持つという目的で開発されました (日本語版は「ヨーロッパ言語共通参照枠」という訳になっています)。当協会への、「英検と CEFR との関係」についての問い合わせも増えていますので、当協会が CEFR をどう位置づけているか、また、英検と CEFR との関連性などについて、どういう研究や調査を行っているかということをご紹介します。

2008 年の 2 月と 10 月に、当協会のホームページで、英国の移民・入国管理制度の改訂に関わるニュースとして、英検と CEFR との関係が少し紹介されました。その内容を改めてご報告します。2008 年に英国の移民・入国管理制度が大幅に改訂され、英国に就労・就学目的で入国する人に対して、年齢や収入、学位、英国における就労経験などに加えて一定水準の英語能力を求めようになりました。これらをすべてポイント化することによって入国の可否を判断するシステムに改められたのです。同目的で入国する人に対しては 5 つの階層 (Tier) が設定されており、それぞれの Tier で必要とされる英語能力の判定には CEFR の 6 つのレベル制が採用されています。あとでこのレベル制についてもっと詳しく説明したいと思いますが、まず大雑把に紹介しますと、初級から上級までの、6 つのやや幅が広いレベルが設定されています。初級の A1 から始まり、A2、B1、B2、C1、最上級の C2 までです。ビザの申請の際、相当する Tier に必要とされる英語能力があることを証明するために、英国内務省が認定している試験の結果を提出しなければなりません。Tier 1 の場合、CEFR の C1 という上級レベルに相当する試験として、英検の 1 級が認定されています。Tier 2 の「英国の労働力の欠落を埋めるために求人される仕事の技術を持った者」に対しては、CEFR の A1 という初級段階レベル以上の英語能力が必要とされるので、この Tier には英国内務省が英検 3 級以上を認めています。英国内務省が発表している認定試験は List of Approved English Tests として公開されており、その中で、英検の 3 級～1 級がどの CEFR レベルに相当するかが示されています。

## ■CEFR の概念と作成の背景

さて、CEFR とはどのようなものでしょうか。名前を聞いたことがある方の中でも、はっきりした概念をお持ちでない方も少なくないと思います。冒頭でも触れましたが、CEFR の正式版は欧州評議会 (Council of Europe) によって 2001 年に公開され、それ以降、急速にヨーロッパ各地に普及していきました。目標は「ヨーロッパの言語教育の向上のために基盤を創ること」(Council of Europe, 2001, p.1)。共通の基盤を創る必要性について、CEFR では次の 3 つの具体的な目的を述べています (p.5)。

promote and facilitate co-operation among educational institutions in different countries;  
provide a sound basis for the mutual recognition of language qualifications;  
assist learners, teachers, course designers, examining bodies and educational administrators to situate and co-ordinate their efforts.

CEFR はいずれの目的にも同等の重みを置いています。実際の使用方法として、2 つ目の目的、つまり「異なった学習環境で得た資格を比較することを可能にすること」が一番際立っています。冒頭で説明した英国内務省の認定試験の決定方法もその例の一つです。

欧州評議会のメンバーとなっている国々に CEFR を使うことを強制するような法的な力はありませんが、CEFR が公表されてから、わずか 8 年間で使用範囲が拡大していることが話題になっています。原因は一つだけではありませんが、CEFR の中心となっている考え方がヨーロッパでの言語教育に対する長い歴史と経験に基づいていることがその原因の一つと言えるかもしれません。正式な出発点は 1991 年、スイスで行われた政府間のシンポジウムだとされていますが、実は CEFR の歴史は 70 年代までさかのぼるという考え方もあります (Morrow, 2004; Alderson, 2005)。長い間 Council of Europe が支援していた言語教育に関する研究の成果、例えば、Threshold や Waystage のレベルのモデルが CEFR の誕生の背景になったと考えられます。

## ■CEFR の大きな 2 つの特徴:「多言語を対象にする」「plurilingualism」の考え方

CEFR の作成を立ち上げた 1991 年のシンポジウムのテーマは Transparency and Coherence in Language Learning in Europe: Objectives, Certification, Evaluation でした。シンポジウムの結果、参加した国々は、ヨーロッパ内の文化的な交流、人の移動や経済の発展を促進する重要性を認識しました。それを起点にして、Council of Europe はヨーロッパ内の交流や異なる母語を話す人々の間のコミュニケーションを促進するため、「CEFR の作成を通じた言語教育の向上」を目標にしました。ただし、一つの教育方針を規定することや一つの言語を共通言語として指定することが目標ではありませんでした。逆に CEFR は、ヨーロッパの多様な言語や文化の豊かさを資源として考えて、それを保護すべきだと強調しています (Council of Europe, 2001, p.5)。つまり、CEFR は第二言語としての英語だけに対する教育方法や達成度レベルのシステムではありません。特に日本では、CEFR は主に英語教育に関連して話題になっていますので、この点について誤解されることが多いのですが、ヨーロッパのどの言語にも適用できるように、まさしく「言語共通参照枠」になることが目

標です。そのため、言語達成度を表す、6つのレベルに対する説明(能力記述文、英語では descriptor と呼ばれることもあります)は詳細な文法のルールなどについてはほとんど触れていません。例えばある descriptor が、英語での定冠詞の使用について細かいルールを説明すれば、当然、ほかの言語にその descriptor を適用できない可能性が高くなるからです。このように、Common European Framework の Common には限界があります。最近、ヨーロッパでは、CEFR の普及に当たって、特に学校教育に導入される場合、この制限にぶつかることが問題になっています。そのため、共通にできる部分を基盤にしながら、その上で、各言語に適用する細かい使用方法や特徴などについての説明を作成するプロジェクトが多くなっています。European Language Portfolio(ELP)はその例の一つ。多くの国の教育機関などで、その国や地域の言語教育、特に小学校や中学校の教育に使用するために、CEFR の descriptor を工夫したり、子どもにわかりやすいように書き直したりしています。そして新しい descriptor は Council of Europe が認定する ELP の中に使用されます。英語に関しては、English Profile という大きなプロジェクトも立ち上げられています(<http://www.englishprofile.org/>を参照)。

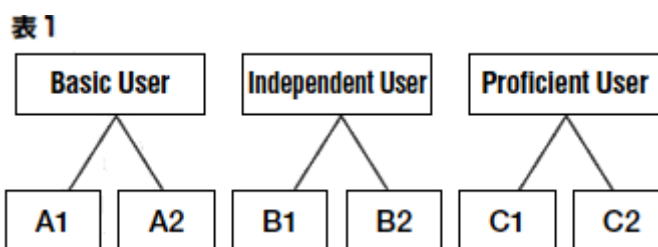
CEFR のもう一つの特徴は plurilingualism という考え方です。CEFR は plurilingualism と multilingualism を区別しています。概念は抽象的ですが、CEFR にとっては multilingualism を「複数の言語を別々のものとして勉強したり、身につけたりすること」と解釈しています。この考え方では、学校で外国語としていくつかの言語を勉強できる環境を整えれば、multilingualism を促進することができます(Council of Europe, 2001, p5)。これに対して plurilingualism は、「すべての言語に対する知識や経験が包括的に学習者のコミュニケーション能力に貢献すること」という考え方です。母語以外の外国語を勉強する際、その知識が「外国語」の枠に入れられるだけではなく、その経験が学習者の考え方を広げ、母語を使用する際でも新たな方略から選択できるようになります。一方、ある外国語でまだ片言しか話さない初級レベルの場合でも、母語やほかの既にある程度知っている外国語に対する知識やコミュニケーションの経験を生かせば、その知識がコミュニケーションを図るための助けにもなるという考え方です。Plurilingualism は言語教育に対する柔軟な考え方や教育方針を育てることに焦点を当てる考え方で、ヨーロッパにふさわしい、国際社会に参加できる人間を育てるための教育方針を示しています。

## ■CEFR の共通参照レベル

以上の説明は CEFR に対する簡略なアウトラインにすぎません。ここまでだけでも理解していただけたと思いますが、CEFR は非常に大きな社会的な目標を持っています。内容の構成に関しては、CEFR は3つのキーワードを取り上げています: comprehensive(包括的である)、transparent(明確である)、coherent(一貫性を持つ)。英語版は 260 ページで構成されており、言語教育や第二言語習得などについて、幅広い分野に触れています。中でも CEFR の中心になっているのは言語達成度を表す Common Reference Levels(共通参照レベル)です。レベル制についての説明と、各レベルを表す descriptor 集は第3章、4章、5章に提示されています。CEFR は Common Reference Levels 以外の内容もありますので、CEFR の作成者や研究者が「共通参照レベルの表だけに留まらないように」と注意を促しています。それはもちろん正しい指摘ですが、Morrow(p.10)が次のように述べています。“Of course the CEF contains a lot more than the scales and

descriptors ... but these are the core.”CEFR の共通参照レベルは CEFR の大きな目標、つまり異なる資格を比較することを可能にするための大切な道具ですから、CEFR の中で一番注目されている部分に違いありません。

これまで述べたように、CEFRには6つのレベルが設定されています(表1)。このレベルは、実は初級、中級、上級という従来の3つの大きい段階をそれぞれ Higher と Lower の2層にさらに区分している仕組みです(CEFR p.23)。



CEFR の第3章では全体的な尺度が Global Scale として紹介されます。CEFR の作成に深く関わった Brian North(2000)は、Alderson が分類した3つの尺度のカテゴリの中で CEFR を User Orientated Scale として位置づけています。User Oriented Scale の特徴は、尺度の各レベルの意味を一般のユーザー向けにわかりやすく説明することと、ユーザーがレベルの意味を解釈できるよう、各レベルに対して、典型的な学習者がどのようなことができるかを明確にすることです(Alderson, 1991)。CEFR の Global Scale では、一目で尺度の仕組みがわかるように、初級から上級までのレベルが1つの表にまとめられ、それぞれのレベルに代表的な can-do の descriptor が提示されています。

表2

C1	Can understand a wide range of demanding, longer texts, and recognize implicit meaning. Can express him/herself fluently and spontaneously without much obvious searching for expressions. Can use language flexibly and effectively for social, academic and professional purposes. Can produce clear, well-structured, detailed text on complex subjects, showing controlled use of organisational patterns, connectors and cohesive devices.
B2	Can understand the main ideas of complex text on both concrete and abstract topics, including technical discussions in his/her field of specialisation. Can interact with a degree of fluency and spontaneity that makes regular interaction with native speakers quite possible without strain for either party. Can produce clear, detailed text on a wide range of subjects and explain a viewpoint on a topical issue giving the advantages and independent disadvantages of various options.

表2は、Global Scale のC1とB2レベルの descriptor だけを切り抜いたものです。これまで説明したように、英国内務省が発表している認定試験のリストでは、C1は英検で言えば1級に相当し、B2は準1級に相当

するとされています。Global Scale はわかりやすく、ある程度のレベルの特徴を伝えていますが、Morrow (2001)が注意しているように、Global Scale は CEFR の尺度にとっては“just the tip of the iceberg”(氷山の一角)です。CEFR の 4 章と 5 章では、Communication Activities(コミュニケーション活動)、Strategies(方略)、Communicative Language Competences(コミュニケーション言語能力)という大きな分類に関連する illustrative descriptors(例示的能力記述文)が数多く並んでいます。大きな分類の下に、descriptor がいろいろな活動の種類などにまとめられ、それぞれの活動の種類に関連している descriptor が A1～C2、CEFR の尺度の順位に並べられています。全部で 54 種類の下位分類の尺度が提示されており、ほとんどの下位分類の尺度の各レベルに descriptor があります。例えばリスニングの活動に関しては 44 の descriptor が 6 つの活動の種類に区分されています(表 3)。Global Scale に表示されている descriptor は、第 4 章と 5 章にあるコミュニケーション活動などについての、A1～C2 まで並べられている descriptor から、代表的なものを抽出して要約しているものです。まさしく Morrow が指摘している通り、Global Scale は氷山の一角だと言えます。

表 3

コミュニケーション活動の種類	Descriptor の数
Overall Listening Comprehension	12
Understanding Conversations between Native Speakers	5
Listening as a Member of a Live Audience	5
Listening to Announcements and Instructions	8
Listening to Audio Media Recordings	6
Watching TV and Film	8

CEFR の尺度の作成過程を考察している資料がいくつかあります。CEFR の付録 B、North(2000)や North & Schneider(1998)が descriptor の開発や検証プロジェクトを詳しく紹介しています。これらの資料によると、CEFR の descriptor を開発するために、開発チームが、既に各機関などで採用されていた多くの言語達成度の尺度の記述文を検討したそうです。これらが CEFR の descriptor の起源になりました。North(2000)は CEFR の p.386-p.415 でそれぞれの descriptor の起源を明確にしています。ただし、CEFR の尺度の開発と検証の過程は、それまでのいろいろな記述文や言語達成度を表す尺度の開発とは大きな違いがあります。CEFR の descriptor は 1993～1996 年、スイスで行われていた大規模な研究プロジェクトで検証され、統一尺度として位置づけられています。そのプロジェクトでは、約 300 人の先生が CEFR の descriptor を利用して約 2,800 人の学習者を評定しました。それらのデータに基づいて Rasch Model という分析方法で descriptor の難易度と順位が決定されるという、今までにない規模の統計的な処理を経て開発・検証されたのです。

## ■CEFRの共通参照レベル

CEFRのような、ヨーロッパの社会や言語教育への大きな波及効果を図ろうとする、国境を越えた「共通」の枠組みを提案するプロジェクトは、今までにない規模の統計的な処理に基づいていたとしても、有識者のすべてを満足させられるはずはないということは明らかです。従ってもちろん、CEFRはヨーロッパ内でも指摘や批判を受けています。そのことも少し紹介しておきます。Weir(2006)やFulcher(2004)は、テストの開発のためには、CEFRは言語能力や第二言語習得に関する概念や論理的なベースがまだ不十分だと指摘しています。Morrow(2004)はいろいろな研究者やヨーロッパの教育者から寄せられたCEFRに対する指摘や注意をまとめて紹介しています。「複雑すぎて使いにくい」から、上記のWeirとFulcherのような、論理的ベースに対する指摘もあります。CEFRのキーワードはComprehensive、Transparent、Coherentですが、この3点についてもAlderson et al(2006)はいろいろな指摘をしています。同じような活動に関する異なるレベルのdescriptorの表現が統一されていないこと、ある活動について、あるレベルにはdescriptorが存在しているが、上下のレベルの同じ活動に対するdescriptorがない場合があることなど、テストの開発や妥当性検証などにCEFRを使用するに当たって、問題になる可能性が高い指摘をいくつかしています。ただし、Alderson(2005)が別の論文で述べているように、CEFRの急速な普及と、ヨーロッパで一般の先生方に幅広く受け入れられていることは、CEFRの基礎がしっかりしていることと、CEFRのような共通枠組みのニーズを証明しているのではないかと考えられます。

確かにCEFRは「完璧」ではないと考えた方がよいと思います。論理的な根拠がまだ十分ではないとも言えるかもしれませんが、North(2000)がそれに対して、言語能力に対する完璧な理論が形成されるまで教育の現場が待つ余裕はないと反論しています。彼は、今教室にいる学習者のニーズを満たすために、実用性が高い教育のツールは必要であり、CEFRはそのニーズに応えるためのものであると主張しています。CEFRの元々の目標は言語教育に関わる人々が共通の用語を通して円滑にコミュニケーションができるということ。つまりディスカッションを促進することです。一つの方針や考え方を規制するためではありません。後者の場合ならば、公開されたCEFRは終点であるはずですが、CEFRの正しい見方としては、逆にCEFRを出発点として扱うべきです。ただし、CEFRの今後の使用や広がりについては、もう一つの大きな課題が残っています。CEFRのEはEuropeを表しているように、すべての開発や検証が、当然ヨーロッパの環境の下で行われました。ですから、CEFRのC、つまりCommonの部分はどこまで適用できるか、日本のようなEFL環境に関してもCEFRを反映できるか、日本や他のヨーロッパ以外の教育環境に適用するためにdescriptorや尺度に工夫は必要か、等々、これから様々な課題がますます注目されると考えられます。

## ■英検—CEFRの研究プロジェクト

当協会では、2007年度に英検CEFRに関する研究プロジェクトを発足させ、2年間、調査を進めてきました。まず、プロジェクトの目標を明確にしておきます。この報告の前半部分でも述べたように、日本の教育環境にCEFRそのものを反映できるかどうかということは、慎重に考えるべきです。もちろん、反映できるかどうかを探ることは、プロジェクトの大切な目標の一つです。ただし、英検とCEFRの研究プロジェクトの第一の目標は、英検

と CEFR との関連性を探りながら、海外では幅広く知られている CEFR を、一つのコミュニケーションツールとして使用して英検のレベル制の意味を説明したり、海外の教育者とのコミュニケーションを促進したりすることです。実際、CEFR はヨーロッパをはじめ、ヨーロッパ以外でも語学検定機関や教育団体、行政官庁などに注目されていますし、根拠のある、歴史が長いものとして幅広く使用されていると言えます。一方、英検は日本の社会や教育現場において非常に歴史が長く、日本の EFL 環境の現況や日本人の学習者のニーズを反映している試験であると言えます。また、当協会は、21 世紀を担うテスト団体として言語教育や測定に関する国際的な学会や、海外の教育機関と活発に交流をしています。ただ、英検の活動は日本では広く理解されていますが、海外の研究者と交流する場合は、国内と同レベルの理解を受けることは期待できません。そこで、CEFR のような、広く認められている規準を説明の道具として使用すれば、いろいろな交流を円滑に行うことが期待できるでしょう。

CEFR は、2001 年に公表されてから急速に普及し、それに伴って多くの検定機関が CEFR との関連性を主張し始めましたが、中には根拠がないケースもあったそうです。そのような状況が背景となり、Council of Europe は 2003 年に CEFR との関連性を検証するための研究マニュアル(Manual for Linking Exams to the CEFR)を公表しました。当協会では、マニュアルが求めている、精度が高い検証プロセスを取り入れるため、マニュアルの作成者やその他ヨーロッパでの CEFR に対する研究者と連絡を取りながら、調査や研究を進めてきました。マニュアルではいくつかの方法を提唱しています(表 4)が、どれか一つが決め手になるわけではなく、最終的にすべての観点から関連性を検証する資料を集める必要があります。

表 4

Specification	Standard Setting	Empirical Validation
試験の内容を検討し、CEFR の descriptor の内容とレベルの特徴などを比較する方法	規準設定と呼ばれる、テスト分割点を検証する方法	外部のテストや、その他 CEFR と既に関連性が検証されているテストとの相関などを検証する方法
【内容】多くの場合、内部の担当者が行う基礎的な調査。試験の内容を検討し、試験の測定の狙いやスキルなどを考慮する	【内容】外部の専門家が参加するパネルが中心となる。参加する先生が、試験項目の難易度を CEFR に合わせて判定し、CEFR のレベルとの関連性を統計的に検証する	【内容】検証対象となっている試験と、外部の規準となっている試験での共通受験者のスコアの相関などを測る

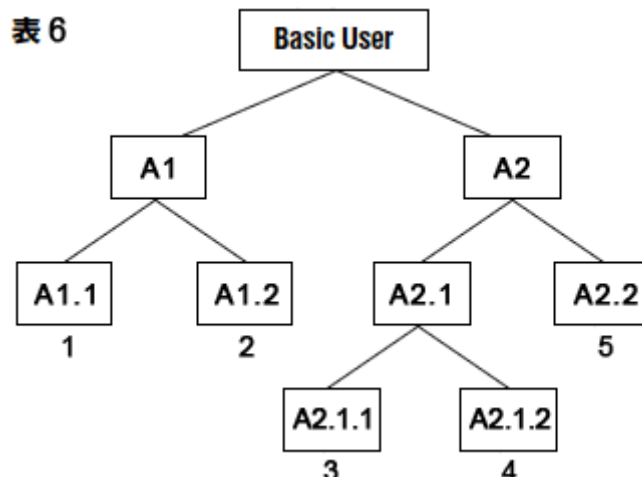
表 5 は、Specification というプロセスを経て、英検各級の内容と CEFR の各レベルを比較した結果、英検と CEFR との対応表を表示したものです。対応表を検証するために、試験の内容以外にもいろいろな資料を検討しました。英検の Can-do リストでは、各級の合格者の、英語使用に関する実生活での自信の度合いを示していますが、能力記述文、つまり descriptor で構成されていますので、これも参考材料とされています。その他、英検の各級が実際にどう使用されているかなどの点も考慮しています。例えば、英検は上位級が海外の大学の入学資格として認定されていますので、同じく大学認定などに使用されている他検定に対応する CEFR レベルを検討すれば、対応表と実際の使用の一貫性を検証できます。

表 5

CEFR	英検
C2	—
C1	1 級
B2	準 1 級
B1	2 級
A2	準 2 級
A1	3 級 4 級 5 級

表 5 において、A1 のレベルに英検の 3・4・5 級という 3 つの級が相当していることに疑問を持たれる方も多いかと思しますので、説明します。CEFR のレベル制について説明している第 3 章では、レベルの再分割についても説明されています。前半で述べたように、CEFR は 1 つの考え方や教育方針を規制していません。ヨーロッパの中でも、文化や言語、教育制度や経済状況など、条件が異なるさまざまな国や地域が対象となるため、特に柔軟性が大切です。従って、最初に設定されている 6 つのレベルは、どの教育環境にも反映できるように、あえて幅広く設定されたそうです (Council of Europe, 2001, 第 3 章を参照)。ただし、学校教育や初期段階の言語教育のような、身近な目標が必要な場合、CEFR の 6 つの広いレベルは採用しにくく、動機付けなどにも混乱をきたす可能性があります。その可能性を考慮し、CEFR ではさらに幅が狭い、学校教育などで活用できるレベル制が必要だと認めています。そこで、CEFR では、レベルに関して柔軟性を持たせ、さまざまな教育の目標に応えるために、表 6 のように、大きなレベルの分類をさらに細かいレベルに分けたものを提案しています。英検の 5・4・3 級までは、中学校の指導要領や教室での活動などを考慮しながら、初級段階の学習者に対して実用性がある目標として設定されていますので、3 つとも、幅が広い A1 レベルの中に位置づけられています。Finland National Core Curricula for Basic Education のように、A1 をさらに 3 つのレベルに分けるとい

う、ヨーロッパでの実例もあります ([http://www.oph.fi/english/publications/2009/national\\_core\\_curricula](http://www.oph.fi/english/publications/2009/national_core_curricula) を参照)。





現段階ではこの対応表は一つの仮説に過ぎません。多くの資料に基づき、英国内務省にも認められているとはいえ、今後、Manual(2003)が示しているように、さらに検証する必要があります。その検証プロセスが進行中ですが、経過報告という形で、現段階で出ている結果を紹介します。

2007年の夏に、European Association of Language Testing and Assessment (EALTA)という学会が Council of Europe と共同の主催団体として、CEFR との関連性を検証する研修会を開きました。当協会の代表として、著者が参加しました。ヨーロッパにおいて CEFR との関連性を測るプロジェクトを進めている団体が多く参加し、ヨーロッパで採用されている standard setting の方法などが紹介されました。この経験を元に、2007年の12月に、日本の大学で教えている教育者や、テストの専門家が参加する standard setting のパネルを構成し、ワークショップを実施しました。検討の対象となったのは、英検1級と準1級の一次試験です。3日間のワークショップ形式で、Council of Europe が行なうトレーニングの資料などを利用して、英検の1級と準1級の一次試験に対する CEFR との関連性を検証するために、規準設定の分析データを収集しました。前述したように、specification の方法で行われた調査の結果、英検では1級が C1 に相当し、準1級が B2 に相当すると考えられるに至りました。Standard setting の分析の結果では、1級の資格を持っている学習者は、“Strong C1”のレベルに相当し、準1級の資格を持っている学習者は“Strong B2”に相当することが考えられます。つまり、ぎりぎりの C1 程度の力を持っている(C1 と B2 の境界線に近い)学習者は、1級に合格するには求められる力がまだ足りないし、合格点まで達成しない可能性が高いと考えられます。英検1級に合格する点数を取得できる学習者が、安定した C1 レベルの力を持つと考えられます。準1級と B2 との関係も同じです。

以上の研究の結果を、2008年6月に EALTA と Council of Europe, 及び CITO(オランダ政府が設立した教育測定の研究機関)の3団体の主催によりギリシアで開催された、CEFR に関する Research Colloquium(専門研究大会)で発表しました。上記の3つの団体によって、2009年に Research Colloquium の実践事例集が出版されており、ここに当協会の発表リポートも含まれています(Dunlea & Matsudaira, 2009)。この書籍は EALTA のホームページからダウンロードが出来ます(<http://www.ealta.eu.org/resources.htm> を参照)。

言うまでもなく、上記の研究は英検の上位級、つまり1級と準1級の一次試験に対する結果に過ぎないので、英検と CEFR との対応表を検証するために、現在も作業が続いています。さらに、上位級の二次試験に対する Standard Setting と、2級以下に対する Standard Setting も必要ですし、Manual が勧めている Empirical Validation も視野に入れるべきです。Manual では、Standard Setting が検証のために欠かせないプロセスとして強調されていますので(Kaftandjieva, 2004)、プロジェクトを担当している当協会の研究開発課で、まずは各級に対する Standard Setting のデータを集めることに焦点を当てて研究計画を実践しています。上位級の結果は、既にヨーロッパの学会大会で専門家の厳しい目で見てもらうことにより、当協会が行おうとしている研究計画や採用している研究方法について確認することができましたし、プロジェクトの方針に関してはある程度支持が得られたと考えています。早いうちに新しい結果を報告できるように調査を進めております。日本でも CEFR に関心を持つ教育関係者が増えていますし、今後、さらに CEFR が注目されると予測しています。当協会では、日本の言語教育に貢献する可能性がある大切なツールとして、CEFR をさらに検討し、できるかぎり、皆さんに役に立つ情報を今後も提供したいと思っております。

## 参考文献

Alderson, J.C. (1991). Bands and scores. In Alderson, J.C. & North, B. (eds.), *Language Testing in the 1990s*. London: Macmillan.

Alderson, J.C. (2005). Editorial. *Language Testing*. 22 (3) 257-260.

Alderson, J., Figueras, N., Kuijper, H., Nold, G., Takala, S., Tardieu, C., (2006). Analysing tests of reading and listening in relation to the Common European Framework of Reference: the experience of the Dutch CEFR construct project. *Language Assessment Quarterly*, 3(1), 3-30

Council of Europe. (2001). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge: Cambridge University Press.

Council of Europe. (2003). *Relating Language Examinations to the Common European Framework of References for Languages: Learning teaching, assessment. Preliminary Pilot Version*. Strasbourg: Language Policy Division.

Council of Europe. (2004). *Reference Supplement to the Preliminary Pilot Version of the Manual for Relating Language Examinations to the Common European Framework of References for Languages: Learning teaching, assessment*. Strasbourg: Language Policy Division.

Dunlea, J., & Matsudaira, T. (2009). Investigating the relationship between the EIKEN tests and the CEFR. In N. Figueras & J. Noijons (Eds.), *Linking to the CEFR levels: Research perspectives*. Arnhem: CITO and EALTA.

Fulcher, G. (2004). Are Europe's tests being built on an unsafe framework? *Guardian Weekly TEFL Supplement*, March 18.

Kaftandjieva, F., (2004). Standard Setting. In *Reference Supplement to the Preliminary Pilot Version of the Manual for Relating Language Examinations to the Common European Framework of References for Languages: Learning teaching, assessment*. Strasbourg: Language Policy Division.

Morrow, K. (Ed.). (2004). *Insights from the Common European Framework*. Oxford, England: Oxford University Press.

North, B., (2000) *The development of a common framework scale of language proficiency*. New York: Peter Lang.

North, B., & Schneider, G. (1998). Scaling descriptors for language proficiency scales. *Language Testing*. 15 (2) 217-262.